

平成 24 年度

# 金沢市埋蔵文化財調査年報

平成 25 年 3 月

(2013 年)

金 沢 市

(金沢市埋蔵文化財センター)

## B. 松根城跡 (加越国境城郭群と古道)

(遺跡番号 県：01395 市：111S)

所在地：金沢市松根町・竹又町地内

北緯 36° 36′ 57″

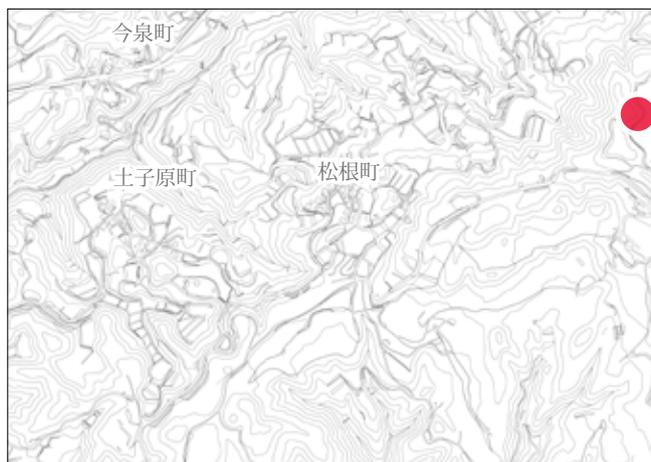
東経 136° 47′ 01″

調査面積：135㎡

種別：城館跡

主な時代：平安、鎌倉、安土・桃山

担当：向井 主任主事



### ■ 遺跡の概要

加越国境とは旧加賀国と旧越中国の国境を示し、概ね現在の石川県金沢市と富山県小矢部市の県境付近を指している。この国境越えには、北陸道の他にも、複数の短距離で越中へ到達する脇街道と呼ばれる山越え道が利用されており、現在それらは、舗装道路や林道などに姿を変えながらも、多くが当時の道筋を踏襲している。これらの道は中世や近世にも使用されていたと考えられる。

本能寺の変から2年後の天正12年(1584)、羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康連合軍が織田信長亡き後の天下統一をめぐる争った「小牧・長久手の戦い」が勃発するが、それに連動して、秀吉方の前田利家と家康方の佐々成政は、加賀と越中の国境付近に対峙することとなり、加越国境付近の街道沿いには多くの山城が築造された。

天正13年8月の羽柴秀吉による越中出陣により佐々成政は降伏したが、この後に越中の西半分が前田利家の長男利長に与えられたことで、加越国境付近の緊張状態は解消され、城郭群は不要になったと考えられる。

加越国境付近の街道沿いに築かれた多くの山城の中でも、代表的な城跡である推定前田方の切山城と推定佐々方の松根城は、天下の覇権抗争の縮図となった利家と成政の対立を物語るもので、両城と共に城が築造される地理的要因となった小原越の実態を明らかにすることで史跡指定を目指している。そして、その戦乱の歴史舞台を未来に伝えることを目的としている。

松根城跡は金沢市松根町、竹又町、小矢部市内山町に所在する。加賀と越中の国境に位置し、砺波丘陵の最も高い尾根筋である標高308mの山頂部を中心に造成されており、加賀平野や砺波平野への眺望が良好である。

松根城跡は、南北440m、東西140mの規模があり、平坦面、切岸、堀切、横堀、土塁、櫓台、虎口、馬出などから構成されている。主郭は南北約30m、東西約30mの不整形な平坦面である。城内に小原越を取り込む、もしくは隣接していることを特徴としていると考えられているが、今回の調査で加賀側に設置された大堀切によって小原越が遮断されていた可能性が指摘できるようになった。現況遺構は16世紀後半と推定されていたが、今回の調査で出土した土器によって確認された。

貞治2年(1363)と応安2年(1369)の古文書に「松根之陣」など見え、近世の書上帳や地誌類には、源義仲や洲崎兵庫、佐々成政の城と記載されている。

発掘調査は主郭などの虎口や馬出、櫓台、土塁、堀切、大堀切、横堀、小原越で実施している。

遺構は推定建物跡や穴跡、溝跡、盛土跡、岩盤ブロックなどが確認され、遺物は灰釉陶器や土師器皿、珠洲焼、越前焼、鉄釘、金属製品などが出土している。

主郭虎口（A・B）では、盛土やAの門跡付近で岩盤ブロックを確認している。

土橋（C）では薄い整地層を確認しており、地山削り出しによるものであった。

櫓台（D）では盛土を確認し、越前焼甕と不明鉄製品が出土している。櫓の痕跡は見つからなかった。

馬出の上側虎口（E・F）では盛土と土塁部分で穴を確認したが、杭や柱跡かは不明であった。平坦地の門跡付近で岩盤ブロックを確認しており、門の礎石になる可能性がある。E・Fの表土直下で16世紀後葉の土師器皿や珠洲焼甕、越前焼甕、不明鉄製品が出土しており、サブトレンチ内から9世紀後半の灰釉陶器や13・14世紀の土師器皿が出土している。また、推定門位置付近から鉄釘が出土している。

馬出の下側虎口（G）では、帯状に延びる岩盤を確認した。

横堀（H・I・J・M）では、Hで深さ約0.7m、幅約3mの堀底及び切岸を、Iで深さ約1.5m、幅約1.6mの堀底を、Jで深さ約1.7m、幅約2.2m以上の堀底を、Mで深さ2.3m、幅1.9m以上の堀底を確認した。

Mは朝日山城へ至る道とされるが、現在使用されている道は横堀埋没後に使用されていることを確認している。

大堀切（K）では、幅約14m、深さ2.6m以上の堀底及び高さ約2.5m、幅5mの畝状遺構を1基確認した。

小原越（L）では、深さ約0.7mで地盤を確認しており、横堀を小原越に転用した可能性がある。

小原越（N）では、大堀切で途切れる旧小原越を2条確認した。

北端虎口（O）では、土塁盛土や平坦地の盛土を確認したが、門の痕跡は不明であった。

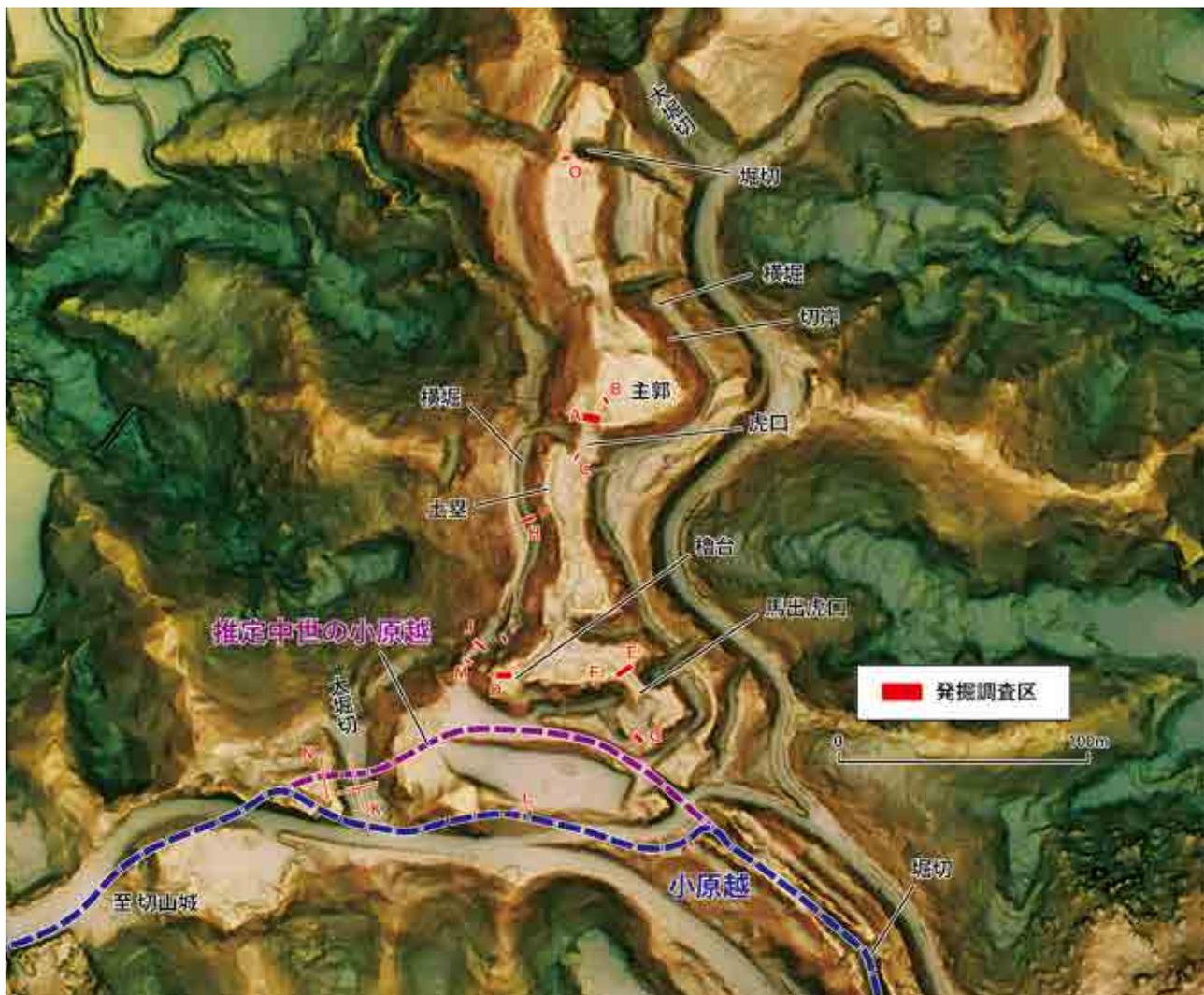
今回の発掘調査によって、推定門跡や小原越跡、堀底、盛土跡などが確認され、16世紀後葉の土師器皿や越前焼甕、珠洲焼甕の他、9世紀頃の灰釉陶器や13～14世紀頃の土師器皿、鉄釘などが出土している。このことによって、複数時期に使用された複合遺跡であることが判明すると共に、現在残る遺構は16世紀後葉のもので、後世の史料に佐々方の城として登場するが、発掘で確認された年代と矛盾していないことが確認できた。

また、旧小原越と考えられる道跡を初めて発掘で確認できた。その道跡は、大堀切で遮断されることから戦国時代末を遡ると考えられる。幅約0.5～1mの道跡を2本確認しており、山城が軍事的に道路を切断したことを初めて確認した事例になる。加賀側からの侵攻を防ぐために、推定小原越を切断し幅約25mの堀を構築していることから、小原越を戦時封鎖した可能性が考えられる。従来は大堀切を迂回して城の南端部を通過する道跡が中世以来の小原越と考えられていたが、廃城後にその道筋になった可能性が高いと考えられる。

なお、測量調査に航空レーザ測量を採用しており、文化財への利用としては北陸で初めての実施である。この測量によって、新たな遺構を確認すると共に、広い範囲で周辺地形を把握することができると多くの成果があがった。



加越国境城郭群と古道の位置



松根城跡赤色立体地図（色編集）と発掘調査位置



Eトレンチ推定門跡礎石建物オルソ図と礎石写真



Kトレンチ大堀切内の畝状遺構立体像（上：斜め方向、下：横断面）



Nトレンチ大堀切に遮断される推定小原越跡検出状況